

【言葉の狩人】

篠原 徹

自然を歩く ①

民俗学は地域固有の言葉の狩人だといってもいい。方言にはその地域の生活や文化の微妙なニュアンスや隠喩などが含まれているからである。岡山県の南部では、アケビの実をネコンヘドという。私の家の猫は繊細でしょっちゅう吐いているが、色合いが違うだけで確かに似ている。俳人・宮坂静生さんが地貌季語を提唱している。ブナ林の葉がまだなく雪の中の根のまわりが空いているのを「木の根あけ」といい、この言葉などはいい季語だという。ネコンヘドは季語にはなりえないが俳語に使ったらどうかと思う。高知県に沖ノ島という島がある。ここで植物方言を採集していたらクワ科のカガツガユをコウジロウゴロシノバンジロウナカセといわれて驚いた。私が今まで採集した植物方言名でもっとも長い名称である。この植物は棘のある、藤本である。字数はピツタリ十七字なので俳句と同じだが、季語だけの句などというものはありえない。しかしどのような由来があつて二人の名前が入ったこんな長い名称になったのか不思議である。生活の歴史にこの由来の秘密があるのだろう。